

第42回

小規模多機能型居宅介護の計画—宅老所からの学び—

近畿大学 建築学部
准教授 山口 健太郎



【経歴】

京都大学大学院を卒業後、株式会社メトス、国立保健医療科学院協力研究員を経て2008年より近畿大学理工学部建築学科講師。2011年4月より現職。

特別養護老人ホームや小規模多機能型居宅介護などの研究を行うかたわら、高齢者施設の設計にも関わる。主な建物に「ケアタウンたちばな、設計監修、大牟田市」などがある。

小規模多機能型居宅介護（以下、小規模多機能）には2つの先進的な取り組みが内包されている。一つは宅老所であり、もう一つは24時間365日の訪問介護である。宅老所とは、大規模な施設介護に限界を感じた先駆者が自宅を開放して始めた取り組みであり、介護保険上の仕組みとしては「デイサービスと自主事業の泊まり」となる。小規模多機能の仕組みは宅老所が基礎となっており、本稿では宅老所が与えた2つの大きな影響について述べる。

1. ゆるやかな環境移行

高齢期における環境移行は高齢者の心身に多大な負担を与える。自宅から施設への転居により生きる意欲が奪われてしまう事もある。認知症高齢者グループホームや特別養護老人ホームでは、施設空間を住宅化し、自宅に近づける事で環境移行による負荷軽減を図ってきた。だが、それでも急激に環境が変わることに変わりはなく、転居は大きなダメージを与える。

宅老所では、このような一時に生じる大きな環境移行に対して、徐々に移行するという方法によりその解決策を提示した。認知症高齢者に対しては、無理に利用を進めるのではなく、時間をかけて少しずつ利用時間を伸ばし、徐々に慣れてもらうようにした。初めは、少しの通いからスタートし、徐々に通いの回数を増やしていく。施設に慣れてきたころに少しの泊まり、そして泊まりが連続して住まいになる。自宅という拠点を維持しながら徐々に施設へと居を移すことで環境移行による負荷の軽減を行ってきた。さらに、担当職員と環境（空間）がともに連続しているため、環境の変化が少なく新しい環境にも慣れやすい状況をつくり出していた。

小規模多機能では、このような仕組みを制度化し、通い、泊まりというサービスを組み込んでいる。住まいについては組み込まれていないが、小規模なサービス付き高齢者向け住宅などを併設すれば、ゆるやかな移行も可能となる。

なお、小規模多機能の説明時に「小規模多機能とはデイサービスとショートステイの組みわせ」と表現されることが多いが、デイサービスとショートステイは、各サービスで職員と空間が異なる。職員と空間が連続する事で、ゆるやかな環境移行を可能にする仕組みという点に留意していただきたい。

2. 既存住宅を転用し住宅力を引き出す

宅老所は自宅を利用して始めた事業所が多く、普通の住宅がケアの場となっていた。宅老所では、施設でも対応できない認知症高齢者が落ち着き、安心して生活する事ができていた。この違いは何か。前述のゆるやかな環境移行や職員のケアによる部分も大きいですが、その答えの一つに「住宅力」がある。

住宅力とは、住宅という建物全体から得られる安心感や落ち着き、包容力のようなものである。住宅力についての研究は未だ発展途上にあり、明確な定義はない。というのも住宅力には、空間構成や部屋のスケール感、素材や意匠など物理的な要素が総合的に影響しており、なおかつそれぞれが文化的背景にも影響を受けている。住宅に対する認識は、国籍や人種、または、個人の生活歴によっても異なり、個々人のアイデンティティにもつながる。住宅力を明らかにするためには、我々の空間に対する認知、認識構造を明らかにしていかなければならず、身近にありながらも難しい問題である。

ここからは私見となるが私は住宅力を「そこでの振る舞い方が分かるしつらえ」と表現している。例えば、住宅力に乏しい大規模施設の場合、研修 1 日目の新人職員のように、どこにいて、どのように振る舞えば良いのか分からなくなる。だが住宅力のある宅老所では、適当ないすを見つけて座り、自然な所作で利用者と会話する事ができる。「ここではこのように振る舞えばいいよ」という住宅からのシグナルを受け、無意識のうちに体が動いている。さらに、無意識であるからこそ、体の緊張もほぐれ、安心してゆったりと過ごすことができる。その一方で、住宅力の乏しい施設では、体に力が入り、窮屈に生活しているような感覚になる。

住宅力がある建物には空間から発せられるシグナルが幾つもあり、シグナルに誘導されながら、または応答関係を取りながら行為が展開されていく。我々

の感覚器はこれまでの人生や文化に裏打ちされ、なじみのある環境ほど安定的な応答関係がとられやすいと考えられる。また、興味深いことに、この感覚器は最近の建物よりも、伝統的な建物を好む傾向にあるようである。宅老所の中には、プレハブ方式によるハウスメーカーの建物と、伝統的な古い民家を活用したものがある。高齢者にとってみれば、プレハブ住宅よりも伝統的な住宅の方が馴染み深く感じると考えられるが、若年層の中にも伝統的な建築物の方が落ち着くと感じる人が多い。伝統的な建物を好む背景には、日本人としての文化的背景や、伝統的な建築物の持つ特徴が影響していると考えられる。特に伝統的な建築物は空間の要素が多く、様々な手がかりを与えてくれる。

というのもプレハブ住宅の場合、壁と天井がともにクロス張りで、どの部屋も同じ素材を使う事が多い。部屋もリビング、ダイニング、キッチン、子ども部屋というように単一の機能しか持たない。プレハブ住宅は、解りやすく使いやすいが、単調で掴みどころが無い。一方、伝統的な建築物の場合、床、壁、天井に使われている素材がプレハブ住宅に比べて格段に多く、部屋ごとに雰囲気異なる。また、柱や梁など構造部材が表層に現れており空間にメリハリをつけている。部屋の名前としても縁側や土間などプレハブ住宅には無い部屋名があり、各部屋も食事から就寝、冠婚葬祭まで多様な使われ方がなされる。伝統的な建築部には、空間を捉える手がかりが多く、空間に深みがあると言える。

このように宅老所の登場により、住宅力という概念が再認識されるようになってきた。民家が持つ住宅力を新築の建物に組み込むことは容易ではなく、試行錯誤の段階にある。住宅力は小規模多機能だけではなく全ての福祉施設にとって重要な概念であり、研究、実践の両面において早急な検討が必要であると考えられる。



写真 民家を活用した小規模多機能



写真 民家を活用した小規模多機能